仁集

イ 5
1205
1

鳩巣先生著

駿臺雜話

東都　崇文堂梓

不許翻刻

崇文堂
15
1205
1

島田藏書

近重氏藏書

新刊駿臺雜話序

駿臺雜話五巻。迺鳩巣室先生之所著也。夫以講論之餘。亹々及此言。大抵發乎所閲者。而研窮理義。藻鑑人物。或往事之可感。或當世之可警。莫非守正學而扶名教之意也。何其諄々諭人之若是哉。一時遊門之士。皆虚往而實歸。從可知已。明遠雖不敏。執經下座。竊與有聞焉。嗟乎在則人。亡則書。先生已遠。九原不作。後之讀此書者。亦可以想見其造詣之深爾。雖然。鐘之應撞而始鳴。其聲之大小洪纖。惟隨乎其

所叩則善教之待其問理亦不異於是而先生之蘊
固有非斯書所能盡者矣書肆崇文堂請上諸木以
傳不朽因與其孫室直温謀焉遂告之
官以一本授之適剞劂功成矣於是乎序

寛延庚午十一月冬至日

東都　直學士藤原明遠謹識

むかし家園。大塚の宅。駿臺にてつねに麓む
すみて住なれし宿の翁有しが。我の三尺小園の家
すまゐて家居せし。なにがしより深山木にぞ隠れけり。
さるは魚き材にもあらず。其稍ありしたゆへになくして。
多く時の容を文をも語りけ。是が世の人をも友として。
ありし時のことをもかきたへしきの序ぞくはらて營
あさくさをもとめて務わたりなりけむ。ちよ哉まつつよ
了衰病身にして加ふるに年の老て疼痺ふ痿病あれば起居
もいとむつかし。けふ月衾枕のうちに親しく書籍

さくらかくなるとかきて世はれの世になれぬるものも
おほかりし。家の世箱の然るその筆に筆はまさしく。
書を講し文を論しけれハ奇字をして佳賓をし
て帰路を忘れしむ。其外花は農月の数を尽し是れ
より閑事をかたる子どもの世にも羅をはりて語を
たゝけ箭は月の夜の弾し漢の文を尽して也むる事なく。
むかしより家の庭のや其しかやまして嘉會を得つゝけ
まへた流をも寳とせし唐錦をたくまへしく飾
りをし。箭も数を弾して清談するまでなりめと

て此の燗をしさも人住にて春は花のこそ携へて帰りしへ
今此世さかひ雅波のまのよしあしを知らず。
昔年まて此の門の詩歌をしはかりがたきなり雅をも
しかしまなふ事をしも知らず其席をそへて。
十の子弟を教して也よりし文字を学し墨を以てし。
月夜を卿をしおもひしは是をかまへさせしまた学識
ありきさ人の数月をかしむる我がの家の者に是はし
ほしてかくの學きさせよとおもひて爲めに言ひくる
雞肋にも是も類しぬくして此の反故や

かくてハ花や手折むともおもひけれバなほさて
児輩にわらハれてまうしめむとく老はるゝ
のあかしぬべけれバなし。
享保辛亥のとし九月中旬鳩巣室氏翁駿臺の草
廬にして筆をとられ

駿臺雜話目録

仁集

老學の自叙
異説まち〳〵
愚公が山
葉公が龍
矯惰警惰
鬼神の徳
妖ハ人によりて興る
年内の立春
釋源空が誓
心の目あき
老僧が接木
扁鵲茱匙をなげる
忠孝の心
聖人乃誠
飛騨山の天狗
袖ひちての歌

新發田藩書

諸道をきくより入

義集

武運の稽古
天人相勝
鈴木某か歌
不伎不求
秘事ハ睫
仁ハ心のいのち
浩然の氣
民を王者の天

釈寂室の秘訣
善悪の報
夢乃浮世
朝かほの花一時
春秋のわかれをひ
佛よわするゝやう
義を心のきまり
敬の工夫
富士のすその堅

天下の寶

禮集

天下ハ天下の天下
枚田壹岐
阿閉掃部
歳寒知松柏を
烈女種なし
天野三郎兵衛
二人の乞兒

智集

風俗ハ政の田地
直諫ハ一番鎗よりも難し
伴大膳
士の風義
手折し手よ婦く春風
澤橋の母
結髪の佝し

燈臺もとくらし
運慶の口傳
法ハ江河のおとし
鵜鶘の物こと
侍さし草
青砥の續松
渡邊番
大佛の銭
泰時の無欲
楠正成
足利家の乱
武田信繁
兵法の大事
孫臏韓信の兵法
兵ハ詭道
「不忘」向君
大敵おそるなし
信集

月々世々の所見
離騒の秘事
遍照の歌
世をすてゝ身をすくふ
詩文の評品
倭歌に感興の益あり
六義の沙汰
作文ハ讀書にあり
多識の吾貫
文章の盛衰
曇陽大師
寸鉄人を殺す
言ハ身の文
一日の澤
尤物人を移す
争ふそうし
駿臺問答の話ハ只に限るにあらず。經傳の文を論ずれば
所論の書にあらず。諸生の問に答ふハ、所問の人に應ふ。

其のおもく所論の文章をなして齎しからん所向の事
多端にしてつひに理ハ今おもふ所記する正道を明らめ。邪
説を辨じ。すなはち学問の大綱に係り。又ハ世俗の諺浅近
の語なりといへども。平生の事に通じて観者の益となるべきもの
ともを採集し。凡そ十かん(?)わかちて(?)あつむる(?)
わかちて章段をわかち。其中に提要の一流を摘く
篇に名付けし。鋪叙偏なく。議論種出するやうまき(?)
ことわりなり。撰次して書なさんと…
たその語をしまれ叙録して家に貽し置かるなし。
国語文やし古雅にしてこれ世俗のやしき語を避るべくなんと。

事情に達く。人聴に切なる所あるハ鄙しき俗語なりとも。
そのまゝ用ひて擇ひまじへず。はた雅言ハ又近代漢字
をもちひず。音なくはじめよりの事なり。常語なりすれども我家
の盛衰に至る運なりといひ。武士の戦功に武邉といひ。人に礼譲を
すゝめるを挨拶なりといひ。事を懈弛するを油断といひ。若又の
義絶を勘当といひ。山林の鬼魅を天狗といふ。是等の類
なほ多し。是ハ諱といふとも。今世にいふ所の名目なれバ
今改るに及ばず。文字も誤あるとも、わらずもて。號令を流
布するを觸といふ。偽字たるべきを。觸字をもちひ。強要に
与く敷くとなるをおもふ。押字をもち

此等は国訓に誤られしなるべし。又字従の論をいはく
といふ字は宗字をもちひ、種〻業の因をうけたるといへば鳥字
をもちひ、俳語の人と書きたるは、伽字を用ゐる。是は戈下の二字
を合せて一字としたる。要の下に走すれたるは弁をとる。白田
の二字を合せて一字として、白地の田といふ意をとる。人加の
二字を合せて一字として、人の相加るといふことをとるなるべし。又同
仇の兵をかくるといふは、味方の字をもちゆれば一味の方といふ
語を略するなるべし。又家號氏族のみちにかゝはるゆゑに梶字を
用ゐ、是は梶字を誤りて梶に作るなるべし。すべて此類は仮名
をもちて其詞をしるし、おきてもよかるべし。されど富山梶原

などいふ氏族をしるすときは、仮名をもちひ難し。誤りなからん
真名をもちひても、答なかるべし。
雑話の中に引用る古語古文をしくは、事實頗る多し。
そのことに對しては、ありのまゝにしるし、大様に
拙きをもて遺したるもあり。又は首尾せぬ事もあれば、後に
本書を考へ去りし、正しからざるもあり。今老耄ありて精神も
乏しく、見るものは處を忘れて、急に考へわくるもあらねば、
必しもそのまゝ考索せよとにもあらず。善読者の取捨は、只其
大意のあるところを知りて、其餘は論ずるにあらず。

駿臺雜話巻一目録

仁集

老學自叙
異説まち／＼
愚公か山
葉公か龍
矯惰警惰
鬼神の徳
妖ハ人によりて興る
年内の立春
釋源空か誓言
心ハ月花
老僧か接木
扁鵲薬匙をすつ
忠厚の心
聖人の誠
飛騨山の天狗
神ひとつの歌

諸道かきよせ人

釈家室の秘訣

駿台雑話巻一

老学自叙

はらく身の過こし昔を思ふにわくれて我若かりしおもひ
々ゑれやのつと初く嫂を結ひて詩書、我事としてよそまさの
ゆゝ式を撤を投て藩邸に遊しおりとく友を負て京師に
旅食次其後小地ニ家居をし、人の八常に舊学を脩め素須
を償て一生を終る事、我なんとて今を小紀郷によ往年そのら
さるに大家の徴を辱して始て故郷に帰を任せしに
才老材腐て、やゝのて丘に首する死を待程によみなりぬ。
されも多くの歳月を卿へて今犬馬のよはひ七十にあまれる宮の年にて。

学は好ミ道に志ばとて、よき人の師表となるべき道徳もなく、
又そなはりたる材能もなくして、むなしく世にあるものぞかし。
かゝる卒爾なる偽説を信じて、おなじく同学なる人々に自ら誇
自得しある事を語りきかせて、後学の為にもとおもへども、それ
そ毒となりける甲斐もなし。ちとおもへども、中々病をつのらせ
痛を添んて、たとへば書を講ずるにも、そのまゝなる月並の
ては宋儒は朱学術の異同におちて、座中に程朱の学に疑を
貽しへかはりて翁の見やうに、某をうつくしとき、俗儒に習
て記誦詞章を学びて多くの年月を曠しく、或時怠惰
日の非を悟りて古人己が為にする学に志あることを。不

幸にして良師友を得たるものハ、諸儒紛々の説に眩惑
て程朱をも半信半疑ひたる定見なき心をとりして又
むなしく歳月を経るに、年四十に近きをさとりわらん歳
くして程朱の学は易きことを知り、さとりてそれより日
夜程朱の書をよみて、心を潜め思を覃くする事今に至
専仰あつく、いよいよ高くきれハ、いよいよ堅く、高遠に道を卑近に
おもへば聖人の後、かならず必其言に従ひて疑なし。されバ天地の為に
堯舜の道なれバ、堯舜の道則孔孟の道なり、孔孟の道ハ
程朱の道なれバ、程朱の道を捨て孔孟の道に入るべからず。孔
孟の道をすてゝ堯舜の道に入るべからず。堯舜の道を捨て

て。天地の道に逆へるハ。老学をわれおのれ信ずる人多からぬより
世に伝はるのミ。それらの事ハ實見あつて世事にて伝らざるし實
見なしてさもありたらんやもしるらし。翁が才忽天地の罰を蒙る
なし。其折ひとめ世に。座中も聴を改むる氣色也。其時翁ハ
始てハ五百年来論定ある事なるハ。今こそ又翁がちかひを言
無きにあらず。朱子に後宋の末で真西山魏鶴山。元にハ許魯
斎呉草廬。明にて薛敬軒胡敬斎の諸賢をこしめ。其外にも
学に志ある人ハ。程朱を尊信せざるハなし。一代の碩学なる。宋潛
溪のおもく。百家を綜核なる。楊升菴のたぐひ。文字論
説の末にいたりてハ。程朱を議するといへど。学術は徳におゐてハ。間
僭する事ハなきのミならず。明の中葉にてハ。おのれが其学
術を私し。名教を頽さしむ。王陽明おこり良知の学
を唱へ朱子を排斥しより。明の学風大に変じぬ。陽明没
してく其徒王龍渓のたぐひ。おのれ禅学とならざるもの世にも
学者良知に沈酔し。窮理を欠伸し。其弊嘉靖萬暦の間
にいたりて。天下の学たゞ陽儒陰仏の流となりて。やゝ諸賢のく
思く見給へ。西山以下の諸賢。多くハ汗下なるもとより。所好に阿
ねるものにあらし。又其徳行材識はるかに明季の姦き小儒どもの
およぶべからず。それらすら程朱萬分の一にも及ばぬ学識
なるに。漫に毛をふきそしりをなし議する。鸚の鵬を笑ひ蠡に

て海を測るに似たり。韓愈がいはゆる井に坐して天を観る。天
を小なりとするの類なり。殊に經籍を讀ずして其説に新奇
なるを好むものは。雷同尾鳴するなり。おもふに近ごろは國家百年
以来太平久しく。文化日に開け。師儒世に輩出しければ。其學みな正派
にあらざれども經業を學て崇信して。ゆるき模範を失はざりしを
そのうちの者とせし。みちの法備りたるへなりて。始て一家の説
をたて。読書をはじめしより。老荘の儒といふ。其言は為んる者の欲
猖狂の論を肆にして。忌憚ることなし。一大虚を咄きは。禅に近
まじはりあわするかり異端を尺。邪説横議世に盛なるおそれのこと傳し。
識に世の盛なり厄運といはるべきなり。韓愈が佛老盛なりし時に

生れて獨り是を排斥して。その功は孟軻に比せしかるの
孟荀に出る書をみるに。天地鬼神臨之在上質之在傍と。
折言ひしそうし。余翁からのそれも孟子の功にもおよぶ次とし。韓愈
のまされるおとしあやまりのみ空言と排斥へられ。

釋源空のちこひ

むかし源空上人九條の月輪殿へまゐらせし一枚起請とて。今に新
黒谷に納めてあり。其折言書は翁も見侍らば。そのうちの
人を謗るに念佛申して極楽に出るやうにはあらず、といふに迷ひけれ。源
空地獄に堕つるともくやしからんかな、もの語と語りし彼宗門に
てもさる趣を述べたる事あればこれを拠として今に至る。吾儒の者といへば。其の折言

はなしければ。尤なりとも思はれど。いまだ極楽といふ事
ならぬ父が堕たる地獄ならんと。つくづく思ひ折し。心を安る
ことを得ざりしが。前代ある殉死の制禁ありし時ある諫
候の家殉死するあまりの中にも。与論のなしがたき人
もあるべき。其家の老臣とかくの其宅へ行て死をとどめ。
申さんと評議せしが。とかく思ひ留らるべからず。只其人をやむこと得
ずして一議し給はざりしか。然らば折ひひとたびこのいへにてこそ快く折るとおもひてハ
心安しいふべく。其翌日なり。殉死の面々亡君の菩提所
へ参て相約して寄り聚りしに。日ある知旧名籍をしるしてけるが
て事なく其日の老臣も行て上座し給ふ。昨日ちのひし人に

ちかく寄て諾容ていと懐気しけれバ老臣うちゑみて。其葉を
あまた欺き給ふとも。いかで折ひに背き給ふべき。に惜まれざ
りし事ハ其人を欺き給ふすれバはれゆるし給へ。昨日ちのひ
やさしき心へハとてかくのごとくなれ共。御殺を散まる為まじき
折からに折ひを背て神罰を得給ふとも。死ぬるよりハおる
深くいふされバ死をきそわるゝ身なくふへ。ともかくおわ折ひを
背く事情なく折ひひとつへぞ。老臣おもと軽ふすして。やあれバ
人の命を喪まで神罰かぶる事を立得く折ひしやう
に深く思慮しおほすに。まつ地獄ある事を立得くなるぞ
うく八折ひはしらぬ今の翁が折ひもさてまで異なり。上無く皇天

ぎやうきたる下は后土(こうど)に履(ふ)く。天地よりうけて折を不折(ふせつ)とし
歎するは天地の罰をかうふる也。されば我道の為に折を不ず。六源
なくも用ゐるなり。是によりて云も也。釈氏の教は有を無とし
實我虚とするにあらず。御身を守るを背るに此は有を無とする心なり。
虚を実とし此は実を虚とすべし。されば極楽地獄のさたは
いかに虚なる事也て。これらもとより真假一如(しんかいちによ)ところとて道をとく。
往生の教をもて衆生を導けば。覚悟(かくご)を知れは恩愛(おんあい)より
流(る)らず。して念仏滅罪(めつざい)の中に帰してやうやう是釈迦如来の
密青(えつし)なるに。我ゑくも諸宗の祖となる経の傳は付有を
互(たがひ)にんをとかくなし傳く。假(かり)にも浄土(じやうど)地獄(ぢごく)のさたを説ける

事といへども今浄室の折ぞと相傳(さうでん)の旨(むね)なれども。九條殿此
ゆるへき浄土をなくし。浄室の随へき地獄をなくし。されば云を
とく有にし。虚をもて實として。死生を離さん
る法とすれば。釈迦の本意の為へ。そのまゝはいにしへの偽(いつはり)なき
事となりぬ。吾儒の誠(しせい)をもて人を教化する道といへ。
雲泥(うんでい)のさたなるべし。

異説まちまち

ある日。翁の病を問ふとて人来りしを。翁も徒然(つれづれ)よもすがら
傳ふ。今よりも志は侍(はべ)るにや。されば侍るは程なりとて。同じく
くし語るわひし。経は當代異説(いせつ)の事に及ぶ。座中一人翁

むかしハ多く今ハ西京東都におゐて世に鳴る人を率る儒者
の説を聞ざるにや、或ハ我國の道とて神道を教へるごときもあ
り、或ハ陽明が学とて良知をとるといふしてすゝむもあり、或ハ古学
とて新義を造りいだすもあり、紛々として実同の流おふし。
いかなる説をとり何れを非とせん。翁のいはく、おふくいふハ思ひ改るに
是や、翁言いはく、當代門戸をたてゝ実説を唱ふるものおほしといふ
今の儒者ハ流とことに聞へ、傳ふることを言人にすゝめて
不見ならぬ傳ふるをしらず、翁が古き聞をとし、緒をもといふ
いふまでもなき傳へを、その道を天といひて一原するもの
なかその一原のとある代きく情をしめ道ハ此の國の道と

て人の国とこのいふ人から、良知の説をとく、窮理をすゝむるといへども
す、鄒魯の学をとく、濂洛さたる世のものなれ、緒をとき先を知らバ
聖賢の書よおもて、聖賢の書ハよきのなれ、さまざま志
を遂るくはしくよみとして、ハ、おのが説を得るよし、今の
儒者、おほくハ自高ぶれんおもて、濂洛の書をくはしく讀
人もしらず、いふる程朱の藩籬すら窺ひをふして、己の人我
先々はならずハ大賢を譏り、不見の説を姑くさし
置て先其学の浮屠浮淺なるをして志を説き
さやうの人ハ孔孟の書をもくはしく讀ましく、道ハ孔孟を
もち得ざらん、孔孟の言を得らしてハ、いかで程朱の説を

郷なものゝ人にて。疑らしく程朱を凡好くして議するとも。孔孟を議する事ハ甚だはゞかれば。其の説ハ孔孟の意に郷あるさゝなものとも。孔孟を二千年来世ニ尊信されたる先議を立ハ人のうけつハ。ねばらず。程朱を世代ちかく。明朝にて或ハ議する人もありて今就方よりて是を議らねばすまぬハ。ほぼ是毛遂(もうすい)が、人のあり国人成ことを す物の一定せぬ事あつて意のかへりて後よし。又己が道徳学術孔孟よりハ全く及ぬとはいへ其伊わりとも。今またハ今程朱を議るハ先己が賢ハそろうが程朱よりも高きことを見る許されども。其説ともわざと新たといはしむ其説をたてゝ我国の君に擁し湯武放逆(えんげき)の類ひと見れ其ハそれから神道にも仁義のおゝいなるかや

わが身の良知と思ふ中で其説をたてゝ仏性を明徳と並べ称し。或荘房韓康を智仁勇の士と云ふ。其ハそれから良知ハ是非の心なわらさるにや。わが身ん古学と称して其説をたてゝ大学を聖人の書にあらずとし。孔叔の道二つにわかちしといふハ其ハそれから古学ハ徳性外にやわれむ。是等の説のみにても翁が愚をのぶるすおくべからぬ仁義さすらべ。内外を合せ古今を通ずる也。余て程朱代学ありわざれ大中至正の道にて。孔孟の正統なるにおのづの実論をわるべきな翁がねらく思ふ所に程朱の学とするなれども。からら。身を以て践(せん)履(り)とせ除して。余て講論をのミ事とせハそを学ハ正しかていかにも道ありしての得るべきなるべき。明路はまでそ其弊(へい)

あやしむれバ陽明も支離をもつて朱子を譏りそしり邪説の起れ
るなどといひて實行も亦おこなはし實行を忘まつく空談をたつとむハ
聖賢の戒るところなり今文翁も事新しく申すも疎に反を演
ぶるべし慎むべきことなりけるとぞ

心のめぐらし

座中又ひとりいふやう翁の仰らるゝごとく吾黨の士ハ相戒めて
實行をこそつとむべけれ邪説を距く上策なりといへりさりながら
孟子も楊墨を距くハ好辯の譏をバ辭し給ひたり其要ハ
論じて君子ハ經に反るのミといへど猶おぼつかなし況や今儒学の號
辯の徒のさかしらにまかする輩のごとくそひ給はて邪説妖妄の説稀く

萬葉の古くまうけたるハそれをいひて辯説を費や
さんよりハ吾道を淺くのこするにかくはなるを行ふに事なく
ばある儒者の徒とて耳を驚かすをおそれて道を立て出るを
わざわざ聖人の作を説けるも又いふに道をすて事物當然の理に
ならぬ文雅風流のたぐひなり又いふ五倫の内に夫婦の道ありとて
そのうへ天性なるに其弊は長ずるものとひ父母とも兄弟の類へ人
の性にわからず聖人の作にあらずして其作者聖人ならぬ故に
古今に行はるゝ變するものなれば是ぞ古の邪説なりといふと五く
さほど帝廟にも憚るにもなれやうなくなるもの也とて互に
いづれなりとも貴むべく翁ニこたへて洪賢ハ東坡が月喩の説

を見ながらやゝすまして盲たる人なれバ。目さへ〳〵見えざる物を思ひ
てかの人に見へバ。月ハかく圓なるものぞといへど。銅鑼を探らせられよ。
銅鑼をならしく。さて八月ハ聲ある物とおぼえ。又かの人に八
月ハ光ありて。燭のあるやうなれバ。かの津らわるゝ事なりとおぼへけれ
ばかりの事なしといふを聞て。蠟燭をさぐりて。さて八月ハ何ぞく
長きものなりと思へり。今此世俗道理にくらき人多し。何と見
書を讀ても道理にくらき盲なり。斯る人ハ目ありてもわ
きまへぬ盲多きが傳ふるに八その盲たるところをそいふべき
おもひあやまちて。此人の目をそこのうべし。おぼえざる事多ける
ことも多く。其盲のまよひをして。今時ある我との説ぞ。これわかれて目なやむべ

なさけなくしてかく偽る。もとより變心の人を相手にして是非を
論ずるに似たれども。その論ずる人によりて説を同じふするとやいはん。然
れども翁ひそかに此説の起りを考ふるに。其人みな宋儒の
なりて。宋儒の儒ハ諸子百家を渉獵することをのみ好みて。四
子六經さへよくよむでなし。また其文辭訓詁を僉議し
て理趣の妙なるに及ざれバ。自らかゝる學者ハ義理ようら
きをしらざれバ。飽まで己が博学を自負して虚誉を要する
にいたる。世も亦是をよく推崇して一代の儒宗とす。明季諸儒の
風大抵かくのごとし。それより放蕩不遜にして。人に驕りて傲
るを高致となし。好て大言を吐き先賢を毀りて抗衡して高く唐

宋諸儒のよきかんとにハ、物まなびして有識なるをもて人にハ学ばしめて
荀荘の餘毒をうけて文をもて王李の浮華を捨かたきとされ
ハ已々の臆見をもつてせり。道もて天地をわかつとらし。事物當然の理を
わかきとせん。己の曲学を合せて道を文雅風流のものとし。己が信じ
てみつからて。吏學の外を又偏なる人の性にわかきとせん。今よりの論
するやとし各わくるやうつらぶ世俗多く之を信じて。辞を色説をな
すを好むものやうに世を奇怪を好むものとかん今史
人の心術を害し。世の名教を損するものやも至けりしもの有のく
又周礼を造言の刑あるもの。その為めに作るきもの。この者此世よ翁
の道徒しやう材力事に拙きものとて。是を支むとするハ。甚く大度の

一本をもつてなし。争ひ言て距き。辞して闢くとも。なまじの信
まへき。己の量を志らされ。識もの。身そのゝまかせて作るものとハ
徂徠氏従ひ先王の禮服をもちて。宋人の章甫を越して売
るあらし。断髪の俗の中へて用ると云ふ。徂徠氏説ハ天下の
名曲なりもとも。郢客氏陽春を楚に唱ふるに似たり。鴃舌氏俗
に和する人もなし。詩に云く。知我者ハ我心憂ありといふ。不知我
者ハ我何をか求むといふ。悠々たる蒼天也。何人ぞやと。詩ハ周の
太史周家の衰るをうれひて作るもの。今翁も吾道の衰るを見る
にし。事もこのまゝならバ。人をおかしうるまぬくし
愚公の山

さればとし翁のいへる。知己(ちき)を一世にもとむれども得がたし。昔より邪(じや)
僻妄説(へきもうせつ)をもつて根(ね)とかする事のさかんなる世に行はるゝおほからん。故に
あやしきものありと。女房花の一時をやすむるごとき。大かたうちまかせて、いぬるよ
りおきて。世を歴(へ)て正道への念なかりし。その教を心に得て。
よく其験(しるし)をみんもの思ふべし。未練(みれん)のおもいぬるも。諸君列子(れつし)の
書を見給へりや。愚公が名をきゝしならん。年九十にして居ちかく山の
ありしに。出入のさはりあるをうれひて。子孫を引つれ石をうち。土
をはこび来非(すきくハ)を用ひて一簣(き)ずつはこぶを。智叟(ちそう)と云
し人笑ひていふ。大なる山を汝がちからにてつくすべきことかはと
あざけりけるに。其こたへに愚公答て。我が

代の内に尽ずとも。我が子代をつぎて継(つぎ)つゞき。子の孫の
代まで又其子代々を継てはこびなば。終にはつきて移さんにあらず
やといふ。まことにかしこき教なるべし。誠にわれらとして
寓言(ぐうげん)なれども。此人われはいふに及ばず。愚公がいふ所の実なる事は
世に愚なるもの也といへば愚公が名を得たり。智叟がいふ所の事は
世に智ある者といへば。智叟と名を得たるならし。およそ天下の
事。愚公がいふ所の如し。おそれ多くも一系連々と相続(じやうじゆ)すべし。殊さら世に
智あると称する程の人は大かた智叟の心にて。愚公の山を移
さんとの事を聞くは。其の愚を笑ふ程に。かの中にも其の功を成
就せざるもの。是を笑ふ。世の中に愚公に及ばず智ある者も世の

いへるも智ハ及ざる所あるにや。されバこそ禦寇が世を諷じていはく
かくハ見れバしらぬ。今翁も百年論定するの日をまたず死後に論じ
給ハバ世の明智なる人ならでハ翁が迂濶なるわざを笑ひき
さまで老ひの身なりや。おもんばかる志もなく所を欲すんとおそ
思ひ給ハ是公が山茶梅ナル歎なるべし。

老僧の接木

さる頃見し佳き事く思ひ出し事あり。武蔵の国府中
のさとにはつる院といふ真言寺あり。翁いとまなき
ころ其住僧を尋ねんと来りて寺に行て木の実ひろひ
なぐさめて接ひに住僧の人をもちひて前住の時此事をかん

語りし残されるなるべし。寛永のころの事なりけん。
将軍家宮中にて御遊猟のありし時、此ところにおはしまし
おりに過りて此院にしばし休らひ給ひて渡させ給ひ
老僧に給ひし其時此住僧も八旬に及べくとしおいてさ
傍に侍りし接木して居ける。此住僧の人におまさならで
側に二人之人ありけるを、やがて御覧じける折、此事を尋ね思召
よろしくのみ背き居たりしを、傍にありしもの等も住僧を
し老僧の言はく、わやし思ひくらべくなるに接木するのと
此いふ人ハせうぞくはなくて、老僧の年寄る今接木しても
その実をあげるにたらじ、さるまでの命をもたれじ

たくましからぬ身なれバ上意ありしかバ老僧は才ハ疎く
なれバ八つの人なきに筆をとらせられしがによくなほらず且ハ
給へ今此本とるはさておき給はゞ後住の供ハ亡くてよし
大きにかなしてねたる。狩る八様と志げる者はなりなんと我ら
寺の為さにしすれてかなしおかならく我一代限り
ならぬ筆のたからとて置きありて。老僧のかし實ち
聴かれまじくは感ありて其の後は後住の人に教ゆく事に
住は後の此ちょうど多くは見しハ老僧が遺ん帰て。大
さふありて見て奥へ書入しをはじめ出しありて端寄と賜わる
とあんバいま翁も十に老僧が摂本せるおもく老朽ぬまじとて。

ある限り蒼蠅学をさハやく〳〵人に示し後へ書おとしのこして後世
までも正業其開くる端にもならバ此為に萬の助と
もなるべき事なれバ翁死ても姓つけれバかならず古人のいふ所の死て
も骨くちしかバ〳〵名しまで思ひあらず候まじくハ我がの
名あく譲られたり。蒸君も翁のおんもとろを信し從ひ了。

葉公の龍

たつまとをもうて大世を。翁が才をのて似るやうなり。それのみしく
あやし出へ翁かゝてありしよりかれて聖賢をおもひしは六経を誦
出ても名く載籍のうへにて聖賢を窺ひ見れバ其意にハ得
名るとや。それてかく傳る。今とし真の聖賢とあるかならバ

自ら是とひけらかし人をおとしめ是を人にかくる事あるまじ
きや人をかならず是をしたがへしむるといへどもそのなる事ありて然るに今や
事に皆儒となり林惣洞然して其ゆゑに又かの文義を以て後
世に侍るべき也しかして藝文の語を好みて長歌を書て世を以て日夜
猥褻せしめる時真に語あるを聞て忽ち起る語をよく
言ひしに是を説かるゝにかゝる行為ぬるハむかしの事にて其のしる
わひかんやうる思ひ定めて類なしかなしきハ無益なる事をして
是まで人を誤らしむるハ今東西南北の儒者とよばるゝもの多きは
まこと正学に志ある人とあるべきにて是も太かたは自らを大にして
俗儒と称しけるにて我も聖賢の道を好むかのごとき偽説

を作りて著述を懲ひ是を以て世に傲りて名を揚んとす
されば道に實得の功なき故なれ真の聖賢にあらず自
ら反して相是むしろ是に從ふ者ハ日に聖賢の道を好
むといふべからず蘂ハ公の語を好むにも同じ況や晏嬰ハ仲尼を毀り
蘓軾ハ程頤をそしる考へ見るべし是に齊の賢人といへどもハ
宋の名臣にして是をそしるのとが及ぶべからざるもの
をやされバ漢の揚雄道徳を論し太玄を著し一代の儒といへ
ども一旦賊莽に従ひて節義を失ひし而も
王莽の世にへつらひて半ば先生の学問をそしり
乱世にわたりて節義のたゞしからぬは責むるにたらず雖もハ

太玄五千文作る虚文(きよぶん)なりと誹りしや。後世子雲(しうん)ありて我を知らんといひ
後世莽の太夫なりしく知音なかりし。其の所く言論の事を聞て
その實跡(ぢつせき)をしらざれば。世俗ころけ此鎌(まえ)といふたぐひ。何ぞそれ
みな人信じ。かくまでよかるべきや。二千年あのるまで知らく猶かしかなれ
國く枚挙の何らしらく。我か身の微賤(ひせん)の士なれば。人皆その人を見じ
く桐知し。この甚子九十郎といふ者の十五歳の時。父をなくせよく
行役しなれ。其後手軍同じ程なるを隣の人の子と圍碁
のうへにて論じけるに。九十郎あらそひ。次刀を抜く相手を一太刀
きりしとの。その人をなれされけるほどに其筆廳(ちやう)へなりて後。相手
の創療治(きずりやうぢ)させよしとおほせて。其間九十郎は官長の家に預かる

あづけおく。その膿しるぬまでしき容體なりとの。言語絶るにおよびの
處にまさきものを守りく年よりおぬ亡くなりけれ。目を經く相手終に
創にて果けれバ。九十郎も切腹すべく議定しけれ。程なく其前此
相手の人名跡をおしまれ。酒肴いろいろよういしてあたへける。
九十郎母への文などもかきて。あまたの主人にもあいさつして謝詞(しや)などのべて後程
附居たる家人へもこころよくいとまごいして。まさにいなけ
る。面々へ名跡をおしくも其いはれをわするまでとし給ひけるを。
あるて切腹の時にのぞんで。いかにも辞し出へ余所をさとし
面々は覚あるをまつると酒をもちよひべし。とて奥へ入りて高鼾(いびき)
て寝入けるを聞て。踊り居たりし人々感じ。わけてそ父の目にも

めでたき折なりとて、沐浴し衣服を改め給へば、安藤
みし其後切腹の席へいでて検使に一禮し、静によく切腹しぬ
主有根従容として、やさしきそのありさまに、いつに勇烈老切の
まゝりと、いふさへ、見る者皆迄まして見えくしと、其場に居合たる人々
弟子と縁者、後ごとも語りて、涙おとさぬもの無かりし、十四の年に去りし時に
翁彼が父のもとへ文やりて、其ことをすゝめけるとて、九十郎者が切
腹するに及び、かねての意に此翁の教なりし、さすがに八木鉄なる男
ありしぞとてや安くおそろしといひけり、そのうへ老翁は
父母の嘆をも人々にいひきかせて、ひとへに不幸を思ひて多くおくれし
来るの人と、すのさまをも思ひのまゝに、おとなしく見しゆきにも次されて

むかしハそのきはめてかなしく儀になきさ也して、昔より今に至るまで似たる類
そうしうの事とし、いよいよ年々多く見ハ、いさゝか切腹しけると
いふ事のなきを、ましてさらに八人ものがたりし思ひ侍るといひしとて、古
人のいふごとく、十七にして父をなくし、八十にして、わすれしとかなん思ひ侍りきとぞいふ
を今や和し侍るハ、九十郎の事をそこらの歳なりと似すとしてけるを
かくる者、世にきこへ侍る人とかなしきて、果なんハ、わかやまふ便に出る
中事なく侍る。其上今ハ翁をとゞしめ、言論文字なく、古人の事
を考ふ。その實のわざをしらずして、目のあたりのわざも帰りとり
ひたすらわかれんハ、学者ぶりて、それくへの気なるべし。多年学問し
て儒者といへどもしかなくらの童蒙に劣るの九十郎の覚悟にさまたく

おそろくきたる事の八ツ心をもちのしきなるやうなれバ、徒君も常
よ〳〵と察して、よく〳〵肯を綜べし。

扁鵲茱匙をとるの

他日の会にハ翁いつも述し日、学術の邪正が偏せしハ其論
いまだ盡さゞるに見え侍る。今日其論を果しぬべし。今世儒者
朱子を議するに三等あり。其一等ハ陽明良知の説を祖として
て朱子を議するあり。陽明ハ傑出の人なれバ、朱子の学を毀て
支離とするもよし。いまだいさゝかもしらず。当時朱学の弊
多くハ文字に倚りてとゞまる。内省の工夫もなく、かさなりて朱子
格物の説を義外となす輩、良知を標的として一向に内省ハ

徒とみし。むかしまた其説によりつきたるハ、わ雅も朱子格物
の説、良知を致すとするにあらず、事物に即して良知を致すなり。
今陽明の説のごとく良知をもとめて事物に求むるに及ばずといはゞ、
先王の教、詩書禮楽といふものハ何や。詩書礼楽、事物にあらずして何
ぞ。孔門の教、文行忠信といふもの、文ハ六芸なり。行ハ百行なり。忠
と不忠と、信と不信と、必事物によらずして其理を志すべしとし
ひとりの良知を致せバ、おのづから敬して、礼を学ばずして、おのづ
から知りて、楽を学ぶに及ばず、文ハ学ばずして良知を致せバ、
おのづから百行を備へ、忠信おのづからなりて、其徳を修め
ありて、そのさき道ある、聖人のごとく志なり給ふべし

かく迂濶(うくわつ)なる教をもて結べき。且ハ良知を致さしむ。事理をも
てらしてかの我をなくなさしめ、実く内省をなさしめて私欲を
さら〳〵と良知を致すとすれバ、かやうのわけなり。其目ハ色を、耳ハ五聲
を知る。耳ハかたちなし。耳をもちまでハ五聲をきゝわけて五聲を知る
といひ、又色をしる目ハかたちなし。目をもちまでハ五色を分けて五色
を知るといひ、又味をしるをはかるに、口をもちまでハ五味をわかつわ
きまして五味を知るといふことなし。しかれバ也五聲を知るハ耳に
かぎらずといひ、又聲ハ物にあらず。五聲をきゝ分けて五聲の眞(え)
を知るハ、又五色を知る目にかぎらず。五色ハ物にあらず。五文
を知る人のしれバ、五味を知る口にかぎらずと

いへども、五味ハ物にあらず。五味をわかれしりてこそ五味の眞をしる
ものなれ。況や五聲も清濁(せいだく)物あらく異同あるに、五文なり
淺深物あるにも異同あるし、五味なり厚薄(こうはく)物あるにも異同ある。
其物によらずしてハなのわかつべき。其別をしらねバなり。親を
愛し兄を敬すれバ不学にしてしるなり。これ孝親(ほく)敬兄(けいきやう)
の事なれども、愛敬の理を窮むべし。まづ君子ハ百行皆志の
なるべし。其事に即して其理を窮めずして、己が好むことを悪む
ときハ、なにやらしるべくされわかれず。孝ハ百行の本といへバ、先づ
く事親の事わからず、朝省昏定(あしたにかへりみゆふべにさだむ)やうの事をも行ひ、孝
親の人ハことさらになやまする。其外田舎(いなか)農家(のうか)の

ニ成なりなバ、其親の心ハいかゞならんぞや。胡乱者となるよ
定むべき事とも知らざるぞかし。況や親を養ふなる術も未だ
しらず。體を養ふなく志を養ふの本意なし。親を敬ふハ術もう
やうなくとも、嚴威儼恪ハ事親の道にあらずと。其外父母に於てハ、
恒言不称老叱咤の聲犬馬に及ぶ次といふもの数々あげてなくて
事親のうすなきもの其する即て各其本分をさゝへぬやう
なくわが身親の心をやすんずるハ其の悦べる事とはいふに
ならねバ、ことに聖人のよふをさとしわが身を学問の及ぶ所を業
よわらせて、おそらくハ孝の道をしくすれのことわりもなく、又
心ならずも不孝にもなる事あるべし。此心ハ、たとへ事親に

とやかて学問の道を講ずるにハあらず。又学問の理
がのこらず究めねバ事親なることハならぬにもあらず。然
事親のよふなく其事の当否をきハめずして、又ハ読書に心なく
て聖人孝を論じ給ふなく、わけて反復して其理趣を味へ。其
ふ事をことごとくもしたと致して其事儀をとりて例して志を起し、先
則格物の学なりと。されバ志深く久しうする時ハ、やがて道理純熟
して後にわが身親の心をやすんずるにて親にしたがふべく其道を
よく行ひとげるなし。是程朱格物の学なる處なり。たゞ
力をおよばず用ふべくあるをバ其事を志すべし。其学ハ不学にし
ても有る良知なりといはれハ人々孝弟の心学なるべしとて、お

あらざるを知らずして学ばしむれば其量を得しせる事なし。不学は
てもとを尋ねしむれども、つねには何ともなし。今朱子此弊を論じ
とて格物窮理を廃するは、朱子此意を考へざるの誤なり。矯
枉過直といふべし。それも亦まつまる也。第二等には理気体
用などの説、孔孟曾て言及せざるといふて、拠て朱子を譏する
わあらむ。孔子性相近しといへるの説也。孟子にも性善
を論じ、又其外養気夜気の類なきにも、唐虞三代の
書に何の説もなかりしに、孔子にも似たる事なし
なども、宋の諸先生其精の聖人にもあらずして発して、真妄の縁
あとなきを見て、程朱の説にまさる事を挙す

ごとく称嘆せらるる程の事なり。況や程朱の時、孔孟の世を去る事
遠し。言を撰び論を尽くし、道を明かにするに急なり。道
理を尽くさずんば、何ぞ必ずしも観るとし古今の言を
蹈襲せんや。今朱子の説、孔孟の語にかなはざるにもあらず
うち尭舜の語を尽くしていふ。一合する所あれば古は何に
しも可なり。然るを己が見でおとしめ、孔孟の語にたがふと名付て
孔門の大賢の説を譏しめ毀るなど、其学識の浅陋な
る事言ふまでも無し。其議論を見るに、宋儒の粗鹵膚浅なる
をあざけりて挙正するといへども、其理気
の説をあらため得るまでも、天地の万物

こゝにおいて氣四時に流行し、万物を生じて、おの〳〵そのところをえたり。
是則天道なれども、昭然として見へたる無形なるもの、聖人これを
一等上の形象なきものとなして、氣を配して理とするは、陰陽に
ちかしといへども、其說似たれども、此類は彼に限られおほいになし。先儒の
中にこれに類したる疑難ありといへども、これは朱子の云ふ
如くに考へて、その疑を免るゝ事あたはず。彼これ一通の
見をもつて臆決するやうの事なれば、おのづから理氣前後の
說は微妙なる事にて、一定の理を以て說きつくし、能く是を知る
老子の說をとるべし。ひとへにまかせて、その作るや物を車とつて
て車なし。実をとりて實なし。ものゝ車を数へて、是は輻

なり。是は軸なり。是は輪なり。是は轅なり。輻をとつて車とすべく
ふれば、輞をとりて車とすべからず。輞轅をとりて車とすべからず。次ぎて輻
をすて、輞をすて、軸をすて、轅をすてゝ見れば、車もとめむなし
なれども、むかしより車の理は車のもとに定まりてあり。これにて
そ上代車のなかりし時、車をば作りておくるも、今とても車匠
を作らんとて、輪を斬り、輻を斬りて、何時にても車を作りおくは
車の理常にかはらずして、あるゆゑにそのまゝなりて作りおくも
あらずや。是によりて見よ。車は輪軸より出る故、輪軸は車によりて
ある故、車は輻輞より出るといふべし。車の形ある事をさるそ車の
理あることを知るべし。これは實をとりて見るべきも同じ事なり。

十二時を日とし。三十日を月とし。十二月を年とす。是ハ時なるゆゑ是ハ日
なるゆゑ是ハ月なるゆゑ是ハ年なりとしるべし。のけく日ハ多きハ。外に歳といふ
あるべし。然れども三百六旬有六日に。天を日と合して歳となる外経
ハ第に一定してあるゆゑ日月ハ幼虫のごとく運きハふそそきハ流
こまて上代に暦をも作られし。今も暦家に歴代の暦を作るハ分躔に
て只今なくさ日月を考へ。前百載後百載の暦を作るに毫髪
をたがひなきものハ。是その理ハ日よりも月によりて常
に存するゆゑなり。其故ハ天意ハをして四時行ハる百物生
ずるその樞紐根柢となるものなりて。天地の大極ともなりて四
時をしるし行ハる百物とし是よりて生ずる。然るべく車をうごかす車

なりし。歳をうごかす家なれバ。気をもつて理なりとする旅
もちて方所をなくして上下をもて道理とまでいふなりて孔子ハ
旅をまづして上下をもて器に對して道といふ。其中ハ旅をもて
先後をもて気に對して理といひ。すべて同一理なるに今其
本源をたべくして。枝葉のよく儀論をまじへ異同あ
る其丸庭極のあるべき。體用の説も亦是の道ハ用あれバ必
體あり。寂然不動ハ體なり。感而遂通ハ用なり。然れバ存
養すべきハ。體に即て用存し。動く者省察すべきハ。用に即て體行
はるるを體用一源顯微無間といへり。孔子の敬以直内義以
方外といひ。子思の中和をもて大本達道といひ。孟子の仁義

ものとて正位大道といふにあらずまことに因一理なれバ。體用をいへるにと
も。必ずこの體用にかゝはらざるなる。彼曲學者流儃にして得小自
足とするゆへ。道に全體大用あることを知らずして一端なる論を
たつるに至る。第三等の中にも。放蕩を貴び名検をいとひ。専ら文辭
典籍を學とし。一たび經米居敬窮理の説をきゝてハ。腐儒の
常語とし。相ともに嘲笑ふに至る。若脩己の道において。辭章の
ともしきをその議論をなし。不急の案事用の辯説をなして
人耳を噴ぶきせざるハなし。かゝる事をこゝに擧ていはゞかぎりなき言の葉
にせんかた。大息し付てやまざるなし。むかし扁鵲齊桓公の疾
を見て。ひとたびハなほ手のおよぶにと。二たびに及べバさるや療治
のなかりしゆゑ。業起をすてゝ驚きたりき。俗學者の弊もの
こと多くハ桓公の疾のごとく始めきこえざるべし。儒の扁鵲あれども
療治のなかりしを速やし。況や老學非才学智の身にて何をか道
の辨をかなすべきなれバ。口を箝て驚きたるを泣ぬ〳〵ぞ覚ゆる

驕惰警情

翁又いはく。當代東西兩都の儒をみるに。おのづから一
槩にて論しがたき事も。多くハ異論を好み。名誉を要するより
固くなりて。其病根ハ又異なるもし。大抵洛陽の儒ハ。驕惰の弊
あり。東都の儒ハ剽竊の弊あり。洛陽ハ風氣和し土地狹し
きの故に近き比まで其古の宿儒。おほくハ温厚柔謹にして。

制行正しく。威重ありて人望を失はざれバ。能ある道学温柔
要して惰弱となり。威重を要して驕泰となる。空談を尚ひ
文史を玩びこれをもて自から尊大にして。かくて遯志時敏を
るるをしられ。されバ良工用意の方も、つくしがたきハ只道
を容易ならしむる行ふべく八先賢を慢り。行業を毀
ありてやこれ多く八王孫公子。おほくハそれ艱苦を經ず
八ふれ後これ驕泰なりかるのあやし。宋の武帝の高祖の葛燈籠
麻蠅拂をみて罵て田舎翁とするとし。社宗氏大業を建立せし
艱難をしらしむれバ見てこの寛むらくしれ翁むさし　史記蘇秦
の傳とよるべく。秦ハ我をして洛陽負郭の田二頃あらしめバ。

豈能佩六國相印乎といふ本文ありて。實もさることなれども。今
洛陽の儒者。あるいは土着に安んじて。隱居放言自らたかぶれ。
もし其人をして世務にあたらしめバ。一官をもつとめ一職を辨ずべし
其器にして其任にあたらんや否や。思ふに八洛陽二頃の田崇
をもて懶居求安のよりどころとなしやすく。これをおそらくバいつく
先聖等の人と聖賢の志を論ずべき。東都の儒ハ文学に異なり。
関東の風氣薄く。古地潤しくそまりに武人俗吏甚だしく逼居く。其
風をうつしたる儒者なれバ。其人の着ハ文飾なくして質直なるるる
ものあれバ。のちの今にいたり質實を要して麁悪となりかぬる行
に。放蕩淫蕩徳義を銷刻し。浮辭淫誇文字のみを遊びたとく

八蘇秦か洛陽宿執の害ハなかるべきと。世ぐ游説するハ縦横捭闔傾危の道なりけるのみなれ。さまで今天下の学者。惰弱なるとけ剽軽なる。此二病除かずしハ。高談性命博究群書とも。聖賢の徒といふべからず。横渠先生も是をもて学者の要務とせられしハ。矯軽警惰の一語を挙て示されしなり。惰弱なるハ義ハ知ても志なく。はなはだ郷愿の人となる。剽軽なるハ忠厚の気うすくして。読書の徒ハ隋ちやすし。されバていへバ矯軽警惰の一語学者の要務なるのみなれバ。すべて志あるすべて士たる者の頂上此鉄針なるべし。

忠厚の事を論

それハ士ハ第一忠厚の事をなすべし。その人となり軽薄なる人ハ材知ありとも。やがてわざはひとなるべし。それより後楽毅の伝をよみて。おもへらく。毅ハ戦国のさむらひなれ共。学問ありて道ありしとみえて。その人がらも。いとおかしき人なり。後世毅の将略あるをしらで。学問ある者とハ知らず。楽毅燕の昭王に仕へ上将となりて斉を伐て七十余城を下せしハ非常の大切なり。不幸にして卿いまだ凱旋せざるに先王昭王薨じ。恵王斉の反間を信じて将とし兵権を奪ひしかバ。毅ハ趙に帰る。恵王の大功をすてゝやみたるを。見幾而作不俟終日といふべし。其後燕を趙と伐むとせしを毅ハ固辞して其謀く…の次。

誠に忠臣の法ともなるべし。其の恵王に報ずる書をみるに忠厚なる
人の言行に讒毀多し。戦国反覆の世には空谷の足音ともいふべし
なるべし。その書中に。君子交絶不出悪声。忠臣去国不潔其
名といへるは。三代の遺言なるべし。学問なくしては。誰か
其言の旨ある事をしらず。今其意を解得べし。交絶
不出悪声とは。友とせし人と交通して其人の悪事を
いはねば。もとより其の事なきやうに。其人と中たがひしても。己が
是をいはんとて。其人の非をいはずして交絶て後に其人
の悪しき事を一向に言にあらはさず。君子の忠厚人に負かざる
なり。翁其意を郷し得るとなく。

なからましかば。此事の正しきをしらず。我は暮の義にうらやまん
と思へ。今文翁の傳を見るにしも。おかしの事多し。伊川先生に感服する
なりけり。蘇東坡伊川をそしり悪みて。折々事によりて参差し
程頤の姦と称し。又衆中にて嘲りて。鏖糟陂裏の叔孫通なりと
といひし。伊川遂に東坡が是非を一言の答へもせざりき
是にて知るべし。洛蜀の二党といふ事も。正なる人を邪とする
いたりにして。此事の後に文邢恕初めは伊川に従ひて学びしが後
に小人に党して伊川を讒して涪陵に謫せしめ。門人聞て伊
川に告しに。伊川の答へられしは。故人の恩にて情厚しといふ事なかりしも
躬の心なりとて。いささか不平の辞色なかりし。是等此の後に

吾徒の師法とすべし。忠臣は去國不潔其名といふこと。忠厚なる
事なり。昔比干八人臣なりしも、君と義絶て其国をさらんにあたりの
ちも君の非をいふことなく、わが身をよしと己があやまちをいはず
分の上を潔うせんとするは、忠臣のなさぬことにて、君のあしき名を
よごし自らうらみのことをかくして、おのれをかくするは、是忠臣
のなす所なり。翁が幼き頃ありし時、ちかき所の老人ありしは其父太陽寺
左平次といひし者、長湫の戦に池田勝入のうちなく戦功ありて、其
後天下泰平になりぬ。大坂籠城の事をさへ、仁政なる藩侯
の国に仕ふることをゆるしありし程に、戦功ありし士なる己が
身のおひしるまいれて、侍どもあまた出で、一生己が

長湫なくの戦功をいはずして、親しきものに大将の敗亡しぬる
に、其手に属しゐたる事を己が戦功をいふ人ならば、いひと
得まし。己が戦功を以てハ、惣勢の敗軍を大将の越度にして
一命のいひわけしてのべ給ふ。たとへ其ことをおとなしく
古人忠厚の餘味ありて、いとやさしきことなりし。其戦功をば
八十のよ翁まで語らねべし。

鬼神の徳

ある日講過て後、五六輩の者に侍らしに、おのおの鬼神の事に及
ぶの中に、ゑとをいふ事に、とかく同じからぬ事をいひて、我朝ハ
神国といふ。ちのさかゆる世に神道をとく人あまたありといへども。

いふまでもなく其説隠怪にして。正理を得ざる事なれば是を信ずるに足らず。とかく鬼神の徳は。聖人も仮初にのたまはず。我等ごとき蓄識の人のおそれはかるべき事にはあらねども。只其ふかしぎ道理にて他日の功夫の種ともなれかしと。各同じからぬ益もあらんは。翁きゝて先易を引く。聖人以神道設教とあるは聖人の道は神妙なるをさしてかく神道といふ。仁道なるといふごとし。是を聖人の道とするにあらず。強ちに世に神道といふところの我国の道とかく聖人の道に一等ならずといふにはあらねど。是を得難し。鄙鬼神のかゝる道理を翁も甚しく覚えなく待たれし。自ら是将に益あるわざにしもあらずといへど。中庸に鬼神之

為徳といへるハいかにと尋ね侍る。朱子釈して性情功效と云ハ徳字の義を釈してかくいへども其徳の実をいはず。左傳に神ハ聡明正直にして壹なるものなりといへる。是則神の徳なり。されバ神ハ正直なるものといふ時ハ誰も知りたれども。聡明なるを志らぬ者のみすくなからぬハなし。其故ハ人ハ耳をもてきけバ耳のおよばざる所あり。師曠が聡といふとも。されバこそ目をもて視れバ目の及ばぬ所あり。離婁が明といふとも。尽くしてわからん人あれど思慮すれバ。穎悟の人といふとも猶猶豫あるべし。神ハ耳目をからずして思慮もなく。清らかに真実に感じ真実に通ず。是ゆゑになにとなく滞る事なくして一ツの滞もあらぬを神徳とすべし。

されバ天地の間にハ、耳にきく目に見るもの有といへども、何ごとも
わが身を主とせざれバ、右のやうに見えず、的的に従ひ、あらゆる物の
體となりて、而も盈わたりて、わきまへしられぬ聲も
なきなれバ、人の見聞にハ及びがたくして、誠あるハ其感じ、感ずれバ
通ず。誠なきハ感ぜず。感ぜざれバ通ぜず。通ずれバ忽ちあらはれ、通ぜ
ざれバあらはれなし。されバ天地の間にあらはれたるや。中庸に「視之
而弗見、聴之而弗聞、體物而不可遺」とはいひけるなり。西
行法師伊勢の神祠に詣でよめる歌に

なにごとのおはしますかはしらねども　かたじけなさに涙こぼるゝ

あらハなかなかにおもはれけるも、あはれなる事にて、涙こぼしけるなれバ

くるまよりや涙をこぼされけるとや。是誠の感動によるなるべし。
てゆへに神ある事ハ其徳をあらはし、一筋に信ずるときハ、形も其跡
のなかにも来格して、常に感動する程ぞ涙もこぼれける。
身と人ハ隔てすなはち収まりて、其隔てなく月の晴たるごとく、身の外にあらはれ
其のよりて人しかなるハ一ツに備へ渾融して、神と人と二ツならざれ。
身と人にあるや空々やみえぬ其色ぞなく、すなはち空しきがごとく、あまねくあり
ハ洋々乎として其上に在がごとく、其左右に在すがごとくなるも
是神の和らぎたまふなり。誠の至りにあらずといふ事なし。さらに
神を遠ざかる事とハ思ハれず、身のうちにあらはれ給ふ
いへども神明の舎りたまふ。一毫も私欲のまじはる事なくバ、あらはれ

いはゆる天地の神明と同氣相感して、まことに生ずるところなり。但相
感するといふハ、すぐなる心をもつてするにあらざれバ、西行ハ律義なる歌ゆゑ、
おのづから濟みわたりて、その歌のすがたにけだかさあらハれて、春秋
相感するものなりといふことをしらぬ人、今各々に申す。又身に省
みて内に求めず、たゞ外に筆に任せて詠じて、下学の功積まず上達
せんと思へり。其心がまへ、只今翁の申すハ、さいはひにけふ
よくなさしと思ひ出し給ふやうに、其難儀をかねるまで年々久しく
なりぬるまでに、おもしろからぬことハ、翁の此物語りにもはやもなく
正しき心の誠より出づる歌は、みなよく今も人のしぜんに濟
く自然に歌を作るところに名感心させることあるべし。

聖人の誠

翁又いはく、筆に任する西行の歌もなく、舜の無為にて治まる
といふことを思ひ給ふべし。聖人の誠ハ今神明なりといふべきに
あらず、なほおして八無為といふハ、いかなる所もなすことなきにハ
あらず。たゞ其の篤恭の誠より神のごとくして、おのづから
天下平らかに濟みわたりて、その平なる所見えぬへしとて、まことに政事を
なさるゝを指してよいとして、おもふに任せて、天下何事もなく治まる
日月のごとく、照らすところハ父母のごとし。天地無形の神の感應
ハかはることなし。かゝるときハ、かくのごとく、所過者化とて、聖
人の身の歴るところの土地も變化をなして、おのづからすなほなるものとなる

入るこゝろなし。舜歴山に耕しけるときハ。民皆畔を譲り。河濱
に陶しけるときハ器皆いびつならざるといふ事なく。これも又所存
者神となり。聖人の心にまかせ自由を得て廻るゆゑの
掌にあるがごとし。孔子郷家をえてかくのごとく緩するハ其ほか
事に勤る世にいふ事ハ一ツとしてなし。あらゆるものハ皆
く凡愚なるものも頑愚なる所にあらず聖人の心のかくのごとく仕給ひた
まへる不思議なるにあらず。然ハ旅ゆゑをしめさんためなれ。
されバ君子言を慎み言を出して若ものハ千里の外應ずる況や
その邇きものをや。言を出して不善なるものハ千里の外違ふ。
ふ況やその邇きものをや。孔子もの無言を宗とせよと家を

するもの自らに害をまねくハ風の草
木をなびかすがごとし。其ひき所高きに出て往々家よ
り國を亂し。國より天下を亂して。後の礼
節とさまたげ。あへとて君子ハ常に心をつゝしみ
誤多き者を正しく其身を飾るのみならず。常ハ錦を衣
て其を秘めざるがごとし。其内ハ粗服をしてかへつて
ますます誠をあらはして小人の内行を偏らしてかくのごとく
飾れバくまなきもの蓋するがごとし。其臭ハ外にもるるへ
つとむる也。枚乘か呉王を諫る書に。欲人勿聞莫
若勿言。欲人勿知莫若勿為。此語浅きに似て味ひ深し。名言と

いふ為に作るいかく人のこゝろゆやうなりし。其よなりして人の去らぬ
やうにすれば。やゝしけれど人かへりて悪く利害を深く其
よおかのとし。月と日月とそひく其おもれおさやなれども
あれくす人ハ聖人なり。いかなる君子も過ちなきにあらず。たゞ
其過をかくさんとはせずして。人の見るまゝにあらたむれば過ちハ過ち
と見へ改るハ改るとみえて。其志のかはらざる也。人ハ貴くも
とするハなかく其徳のひかりもまさるなれバ子貢
も君子の過ハ日月の食のごとし。過てるも人皆見る更むるも人皆
仰ぐといへるぞかし。むかし小邾射千乗の盟を信ぜずして。子路
の匹夫の一言を信じ。回紇六軍の兵をおそれずして。郭子儀が

單騎の約をなせる。是二子の誠ありて隣国もしたがひ。回紇
も及ぶ所にあらず。千里の外に通ずるもの也。もとより聖人
の誠にくらぶれば。いかに明白なりて一毫の私なきを。
天下の人皆其ひとりにまかせ。一々に其言をきゝ其面をみると其徳
を信服する様にたがはず。あまねく造化のごとし。是誠の感
通にして。恩威智力の及ぶ所にあらず。是をもていかなる人をも
感通する千里を隔ても。世俗のいはゆる辟言なるや。好まる悪事と
も其實ある事の。いはれざる千里に移りかはる事あるべき。
通ずるのことは限りなからん。
妖は人によりて興る

座中ひとりも神ハ聡明正直なるものなれバ邪術の感應ハさも
あるべきことなれバ昔より妖怪不正のことども世に流布し
侍るもその理あることなれども翁ハ鬼神ハ天地の功用二氣の
良能といひ分論正理よりおこることなれども人の善悪なるに
て氣質によつてさまざまに善悪あるものなれバ神も人も世に降くハ正し
きものにしたがふものなれバ其子細ハ陰陽五行の氣の四時に流行
するハ天地の正理なれバ不正なることも其氣ある間に游散紛擾し
てつゐに風寒暑濕となりてあらはれ不正の氣もあ
らはれて感ずるものなれバ其ことハ一元氣の間よりの氣に侵
おかさるゝものなれバ正氣をもつて感ずるときハ正氣應じ邪氣をもつて感

ずるハ邪氣應ず。但正邪ともに二氣の感應によつてあらはるゝハ邪氣
の感といへども神にあらざれバ。されバ丈夫正氣の感ハ大小となく
精誠の手段にあらざれバなし。太宗ハ高宗の良弼
を感じ。周公の金縢を感じ。中なかにハ。鄒衍子ハ五月の霜
を感じ。韓愈ハ悪溪の鰐を感ず。其事ハ異なれども同じ
く精誠の感にして怪むべきにあらず。前年奥西山の集を見侍る
に或民家の女子。父の疾を憂て夜になれバ天に向て力をつ
くして代らんと祷りしに。其誠感じてやありけん一夜群鵲
よりて遶屋飛噪し。仰ぐに空中を眺れバ大星三ツ爍煜
として月のごとく檐楹の間を照しけれバ。翌日より父の疾癒たり。

西山郡守として。其事を傳へあまり見聞せしが。其閭を褒表
して懿孝坊として記を作り其事をくハしく著されたれバ
尋常ならぬ事にハあらねど。其感ずる所ありといふべし。然るに
衰世に及びて。人のおこなひ只ならず邪氣の感ずる所より。それが為に妖
怪を生ずる事となれり。されバ怪力亂神ハ聖人の語らざる所なれど
是とも其理を窮るハ格物の一端なれバ。諸君能くおもふべき也。
左傳に妖ハ魯の申繻が論じて。人之所忌其氣燄以取之妖
由人興也と云ふより物皆に與する言なり。燄ハ火のまさに盛にして
進退するとあれバ人の氣なくもそのもとハ人の忌あるに
不依世話にいふ鬼の……

忘れさせんとすれバ。思ひおこして。火の心はいかにもしてやめ
よわるところなく見る者も。あやしき事くやうに只ハ氣ならず。つかへて
我ならぬ我が性に狐狸の邪氣に乗せられて幻に形象をあらはし
生じ。ある時ハ妖をなし怪をなすとぞ。齊侯の彭生が
見ゆる鄭人の伯有と見るの類是なり。されバ氣燄の所より正氣
の感ずるに絶えてなきにしもあらず。唐宋小説の書に洞庭湖水
神の祠あり。大湖を渡る人ハ。必ずこれに詣りて
祈る事なりしが。ある貴人母と共に大湖をわたる時に、その祠を鄙しく
信じて往来に必ず賽祀せざりしが。後に湖上にて風に遇て舟破れて。
母の溺死せしに及んで其子初めて父の死を悲しみて後悔する

然りよりて又此祠を多年信仰して。祭奠ハいと懇ろなりしよ冥
助なからんも計りがたし。然るに遺恨なりしまゝわれハ此祠を焼んと思ひしかバ、そて
くりかへし其夜の夢に狐来て恐ろしきことあり、汝いかなる罪をゆ
るさぬ。汝よこしく楽を奏して其恩を報ずべし。されバとてつま
祠をやくことを恐るゝよわれハ又汝が怒気のいきほひに恐るゝよ
もわれハ只いかにも此焼んや決断し兼一念我よあさく
て敵しかたき程よかりて謝するといひ出るとて、われかの齊東
の野語信ずるにたらねども、されども神ハ決にしよあそるといふ
道理あるべきやとも此人怒のおきて、またやめんと思ひ
なりかたの気徴ふして、やくもやめもせず決せざる其気進退せバ。

座ろく神よきあさましく、あらく祟を受しむかし駿府の出城
また狐といひ傳へし狐あるを。人ゞよ手巾をわたしまへバそまゝせ
うるまで舞しかバ、わりいの逆して放る丸くをとる。多く手巾を空よ翻轉し
て廻舞のやうを見せてしばしよ人ゞ與よ入くわへ手巾をわたすなる時に
交れる放るを見つるにやがてもとよりよく手をとりて見せてあそびしよ是く
て甚よろしく悦びけれバ、かの曳人くハまさて渡さしめてあらかゞめ
なりて深くかくもとまねといひけんなりしと語るを大久保彦左衛
門きゝて我ハそのまゝしとて手巾をとらくさまとれどいふ見えさ
ていひてさけくも合分別の人よあらよあそび給へともとけるをねどくて
彦左衛門ハくびをふるふ是のある時しまうく手をかくさせて そとさんと思ひつ

かゝるが故に狐さらに近よらず。さるハ武士の心剛にして一筋に直なる
ゆゑ其氣餒になくして狐に狐も妖をなしえず。まゝいく正人君子にも
おのづから邪ハ正に敵せざれバ、正の邪にかつハ水の火に
ひとしく忽に消る事なし。西域の妖僧傳毅をいのり殺すとて
自から暴死し、武三思が妾狄仁傑にむかひて靈を施し之を
畏縮せしめんとせしかど遂に世に正人君子を退けさりしよ。
邪氣已に去りて威福をほしいまゝにし、巫者のことわりに世をまどはし
あるハ宮觀の淫祠をおこし、浮屠の邪法を信じて、わゆるをそこなひし
貨を費やさしむるハなげかしき事なり。正體もなきをさとらで
なすべからず。故に是ハ其身をよく熟せしむるやうに信向すべからず。

不思議とみゆる事あるハ、まよひまどひて正理を失ふて
てかくおのれをいつはるかのみならず、あるハ佛をも漫に
靈驗ありと称し、いろいろ虚誕なる事を造作して世を誣
民を欺く類多く、衆をあつめて市をなし、銭財を積て山をなす。其人ハ
國家の大賊、其事ハ天下の大弊といふべし。

飛騨山の天狗

夫よくくわしく翁、鬼神の感應する氣の集るところ氣に
游ちハ幽冥にありてとゞまりてかたちとなる。鬼神ハそれぞれにある
ものなく、待るにあらず。寂然不動にして毫末も氣を生して一を鬼
神もいふべからずとしても、豈力の及ぶことあらんや。翁ハあてと

さして我ならずとは。謝霊運が詩に。達人貴自我といひしハ。
暗にかなふといへども。その我といふもの。ふかく霊運がときゝたる
すくなからば天且不違況於人乎況於鬼神乎とあるも。人にハ
ふさ及され天や鬼神も我にしたがひ給ふるをいふなる。三代の
聖人ハみな我をもて天下の上に立て。天下惟我のミわがまゝなる
我志に違ふなるわざなしとしかば。後世の賢人ハみな我をもて万人
の上に立てんと。千万人の中にもちゐる我ある事をしらず。しかさ
れバ我といふものハわがまゝなるにハあらず。一念未生の時。本然未発此
體をさしていふ。君子ハこれを存養して。そのまゝになれバ。天地も我よりわ
位し。萬物も我より生育し。鬼神も我より感應すといふなる。

我よりなせるわざなれバ。邵康節の一念起らざれバ鬼神
もしるものなし。我よりおこりて誰しらんとおもへバはやしれり。
それより付くわがしき事なれバ。かゞみわたりし時人の證ありしハ
小關といやしき工の飛驒山にて。枝を採くるとて牛耳葉を
とする者ありき。ある時山中に枝をきりて居たるに。ひとりの山伏の
鼻の隆さうなるを見るに。いかにも異形なれバ。天狗ならんやとおそ
ろしく思ふ。汝ハ何ものぞ。我を天狗とおそるゝならんといふ。いよいよおそれし
が。又汝がおもふ事を我知れりといふに。さまざまにおもふ事を悉くいひあてられ
ければ。何ともいふべきやうなく。そのまゝにてやみけるが。後ハ其の姓なりし。その
頭にかゝる枝のおのづから落来るに。縮攪して縄にて括らんとしけ

るよんやのこれ見えきしく枝をはえる程く其枝の末。天狗の鼻
よ先くしふおやうし穴。汝らん狂せずまれどのこゝる。おそやし
とく折さずぬるとそ枝のさきけおく。思ひ出ずるやち出さるゝるなき
ハ。おのくハ天狗も及くぬかまそ。気やく走らくし念を生ぜざるなくゝ。
鬼神も窺ひえさるよおんおまきる。常人多くハ今く胡思雜意
常よ絶ることなくなのものをも思ひ生じ作為の中よあもある程よ。乱
くひの遑なくまらくまくハ。我とうふ物自立するゝのあるとれ。さ
まハ其の我を失くしそゆのちハ。心源存養の工夫をなしよく心源
存養の工夫ハ私欲なきを専とれ。およの私欲さえなくまハ静
虚動直となにゐるとも思ひ生作為とうして。静虚の中より道

理のまゝに真をなく見る程よ。万物の先よ定まりて万物の後よ
堕ることなし。鬼神を制して鬼神よ制せらるゝことなし。無聲
無臭にして天下の大本となるをさ體の體といふべし。無思無
為にして。萬化の大柄となる。不御の権といふべし。老子の象
帝之先といひ。釈氏の唯我獨尊といふも。此所をさしていふ。是らく
ることやわらげず。まことは彼ら人倫をすて事物をはなれ。空寂
を事とすれバ。人欲を制すれども。天地とかゝ一するよ至らず
一心を治むといへとも。万事を宰するよ至らず。其體ハ備ハりといへども
其用なし。我が道ハ。なにをとりて大本とし。何をとりて大柄とすべき。
大よ似て大よ似ざる事なるべし。

年内の立春

されば中庸にいはゆる其不観を戒慎し。其不聞を恐懼るとは。
誠の本源のなきすらも。あらはしまさゞる所を持養する
の功夫にして。さて隠微の中一念の起るを省察して。その本
源の地を乱られざやうにすることなれ。又簡要にて仰らるゝは中庸
を講ぜし時とくとはじめなる事にて候。今文に及
そのえまでに思ねる物語に似たる倭歌の意に引合しやれ
し。古今集の巻頭にのせる在原元方の歌もとより歌の意
もとよりちからあるやうに覚え候。二十一代集をくらしや家々
の集までも。春の巻頭とするをふるに大のるは空の霞宿の鴬

など。春のきたる事をとくはるのゞまでよみあへるは春の始を
いふ事は第二段に居るなるべし。おなじく冬を憐くけのけしきも見
えぬに氣色をとなまへるよりは。なかゝなかに云菓の種とせむ。いかに
雑らるべき事なるをといふとやいはんとやいはん。なすの道
作もなくさへそあり。おもし給ひてなる趣たるに。経文にもえらさる作
老といふも。さまでは鈎わし歌を見給へば。翁のおもし給きといふにも
お雅にはまさに我行の修行によるといふにぞ我人さへ其元は一念のきざ
次に獨居の時暗處の事なる時は。なすの者しきと知るべくも。いつ
年の内に春の来るに同じ。一念の萌きざして後に。既にその善悪のさしう
きわまれば。年の内に春といふ事の同じことなれば。これは人望の謬も

毫釐のたがひにおこるといふをもおもはざるべからず。濂溪先生の
幾は善悪なりといへるも此るなり。されば善悪の関とする
念のきざす所をしるべきなり。此関をよく守らば、その人は善とや
いはん悪とやいはんとおもふに、一筋の悪をさるは善に向ふなり。我
儒の修行の事なくするになるべきをしけ修行によく心をつけて色よい
て常によく心をつけて始終をよくさとらば、名をまもる処なるといふべきなれ
さればよく心をつけて勉強をもちて力をそへなば、さとりの道も元
来此歌詞は、おのしきのことでもおもへど、聖学此処をきくべく
深くはつねに吟じて我心の肴とするに勝るべきなれ。

袖ひちての歌

度中ひとりまろ和歌を好める人わすれ給はず。今こそ元方の歌なり
もに訓あるべきによるをも人の心善悪の鏡にして、これを得べきことは
思ひよるべからず。此の物語なくば始めを知らで此と、古今集は
和の集ともいひ、其歌は何をも誠実に本づきおのれのから理に
かよふして見るべくなり。見よ、元方此歌によさし、継く貫之が目
のうちに見る袖ひちての歌をのせしも、月令に孟春の月
東風解凍とあるに、かなひたる處見へ侍る。其意は春風の凍
をとくにや。陽和の氣が寂初の春をしらせ侍るこの氣なる鶯などや
うのうちは、光行は的實には見え侍らぬさまと春風の凍をとくと
いふことをわくべくは、このよろしき、かなへりけるさまよく餘情あるよしきこゆ。

いかにも此春過て此後より夏秋冬とかはりし事ども袖ひちて結(むすび)びし水のこほれるをといふ一首の中にこもれり。さて春たつけふの風やとくらんといへと。今又春になるまでうつりし結びし水の釣(とう)の字をさかる物から。歌によみ出ける事ぞ。作者の心よりうまれきたるを此歌の歌也。古今集よりの世には。いかにも云得すがたはなく。なかなかの手もなきやうなくは打吟ずる時は其の味。おのづから深長(しんちやう)にして。言外にあまるやうに覚え侍る。詩にても。いにしへ漢魏(かんぎ)の楽府(がふ)古詩のごとし。詩は盛唐(せいたう)といへど。漢魏(かんぎ)の詩は。實情(じつせう)よりも發して。おのづから巧拙(こうせつ)をうちはなれて見ゆへに同じことなり。わが國の古今集の歌も其のかみの人の気象すなる後の作者の及ぶ處にあらず。とかく八代集の後は。次第におとろへくだりて

撰者(せんじや)よみ人のことのふりあはれなれ。文章(ぶんしやう)は時世と上下すとあれば。時代の盛衰(せいすい)にしたがふものなるにや。いかで思ひ續くると。六翁の作られしやうちのふりもしらるゝと覚え侍る。歌人の論も大かたさやうなり。むかし右の貫之の歌に付て思ひ出したる事侍る。天文のころとよ。織田備後守一族(ぞく)彦次郎と不和になりて。争戦(さうせん)に及びけるを。備後守の家老平手中務といひし者一族の不和するは。敵國に侮(あなどり)を受ることのなげきとて。和睦(わぼく)のことを謀りしに。事ととのはざりし。彦次郎が家老坂井河尻などいふ老の許へ中務よりこれの歌をそへつかはしとなり。其文のそえに貫之の袖ひちての歌をかきつけけるとぞ。親族のちかきには。袖ひちて結びしもよかなるもむすびきとは不和な

日は見さし侍るなく。今又和睡してきとへのゆるを。春なりる風
やさしく殊んとよのせ侍るやく。のくるつかよの世へくもおつ給ふ。思ひ
かつのくふゆるかきへ有りて。深よ身けき武士のかずもわら笑ねらん
やくお得之侍る。中勢のしあまも思ひのやまねれかく侍。翁いりて
云ひ給ふやや。翁すらかの給さく。昔春秋の世よ列国の士大夫
宴會の時ちくは必三百篇の詩を歌ふく。其よ志をあらはし給ふ其
後此事世よ絶えく。魏晋よりやあのふ有く自から詩を賦する我
物あし。巧拙を争ふ事よなりまいおれなけのし。今まやすと歌も
さかくあそ侍るまむのしよりも歌を好む人をまゐよたくよ流んとのと
するなくし。必しも自からよ詠まずとも。萬葉ハ古今なよの歌を。

時よおもりて云ひしよあまく。お吟し侍るむハ。心もやすまらかふ。
お覚も助くるへし。
白河院五月の御淀よ行幸ありし時。暁よなる程よ子規ハなのふ
鳴く過きましハ。俊頼かのやく一首詠せよかしく覚えしハ。女房ある舟
中あく。淀ある名此ほさい夜をきふと、お吟したるハ。中くおもしろし
くよそあるよハ清すやまてきおえけれし。此傍へ侍るされど言ハね
とくぎ此の歌をかくき次よ云ひよりて有らわなり。作者の心をそれ
とあやかす我平きの趣ひちくの歌を引しや。今子の言れあよふ
を云ひまく。外の事よ引合ありんハ。すくに比興のあてろふものな
ひく。たそく感情おそてきあへ侍る。周人の三百篇の詩を歌ひし

早稲田大学図書

もどかしのおとしいろとやさしき哉るなれバその平が後に信長
をいさめかねて自殺しけるその諌書を見るに学問ありて義
理のわきまへしを志る人とおもしろからぬおしきことなれ古より忠臣義
士の不幸なると痛ましきことハなしとて長使英雄涙満襟
といふ句をとにすさんじけるとかや座中の人々感じあへりき

諸道にさまよひつる

ある時俳諧師に遊びしに月を詠じて諸客来会せしついで俳と
ハ世にみなさく俳諧と懈怠のちがひありやと問ければ翁聞
て世事にさへ俳諧に懈怠すれバやといふハ大かた学者の常
語なれバ翁をそしりやさかやうにやまもるすかくゆへとも畢

竟己の志のあらねバやくわをそまとハ意得ずして世をあるよ
咎をおふするを得る仮世するよまく俳諧く書をよむに懈る
ハさもあるやそれハ一説あるなれバ学ぶと云ハ聖賢の
道を仕ふるも習ふるなりその仕ふる者ハ致知をあら力行
あさ道を其理を志り孫ハ行くまて其理を志るハ書に限
新はよ聖賢の書を第一とするゆゑに学と云ハ致知をさるべし
致知と云ハ読書を主とし其の故に大学に自修も学なるを
よし学をさとく自修に対しぬれハその学と云ふ致知の事
なり子夏も仕而優則学といへり仕るも学なくなるとも仕
有るくとハあれハ学ふとあれハその学とい字読書の類なるを

又子路何必讀書然後爲学とあるをもつて見れバ其のころも孔門の学
とても八讀書をむねとするやうに思ゆへ侍る。其の心へなし学ハ讀書
に限るへからず。書をよみて義理を講し、事物に即て其理
を窮る。同じく致知の事にして、力行の始なりとも。されバ聖
人の道ハ日用事物をはなれず。先ハ父母に仕へ、兄弟にしたしみ
主、朋友に交るにいたるまで、其外世におこなはるゝもろもろの応接にいたるま
て、一事一物いづれも致知の地にあらざるなし。一動一静いづれも力行
の所にあらざるハなし。其の善なる理をきわめ、悪ハ其の悪なる理を
きわめ、善ハ世にする善悪ともに皆これの学問にあらずといふ事なし。いづれも世
事ハさらに止まず臨みといふべきにあらず、翁が趣向にあり。然るに大坂

よりきたりし後生か此地に寓居するありて、翁に相見しき
よし紹介して来りしが、他日、翁の敝廬を問ふ。談論時
を移し、終に翁ちかごろ世事多くして久しく廃学なりと
言けるといひしハ、其人学問を世事のほかなるものと思ひしに
翁是を聞て、其失言を謝しき。翁の意ハ、讀書を廃するをなす
を廃学といひしなるべし、彼きて咎めたるなり。されバ天下
のことに即て其理をきハめ、吾心の知を致すハ、内外を合
するの道なりといふべし。其のころ陽明良知の学をする人、朱子格
物の説を譏り、朱学の格物ハきはめて世の居官職
日夜繁忙する人なきハ、何のいとまありて天下の理をきはめ

さと疑しあるよしきゝ侍らば。先朱子格物の説をおもしくと
ゆるし先一間時を得て事物の理を窮めて後に其事をすれ
ばよしと云るより、わかん。朱子此格物といふハさにあらず。わが身をなし
事るよりの事にも即く孝の理をきハめ、君に事るよりの
其事につけ即て忠の理をきハめ、昨日情のはしをもとむるを今日
ぞ、今日の事のハまた明日のさしあたるを修る也。是格物致知の学
也。居官の任職にハかならず必其人をしもととせ、其学のごとく、居官服
處し、事理を察し、日ゞに職をるに熟し、治平かなるまでに至るべし。
是ぞ格物致知なるべし。居官任職上の窮理のいと便なると
いふ。郷に翁が世に癈学するといふぞ用しるべきとも。さ候一件

事に大小あれバ理に大小なければ、時と処と物とを格物の地に
わきまへる、なのみならず、さりとてひとすべきにわきまへて天下の物
に即して其理をきハめ、しかりとて、おとりの如くに先後緩急の序あ
るべきなり。日用親切のところをすてゝ一草一木の理をきハめよ
といふ。わきまへ、今良知の説を旅くな僅きやうときめつけきまへ
ゆゑ、聖人の道をすてゝわきまへ、およそ天下の道なるものを
さまたげるハなし。詩に云、天生蒸民、有物有則。物あれ
バかならず則あり。則ち法なり。我の人ハ六藝を習ふ。其つかさどる
ところの其法あり。ここに吾人の知を以て其理をきハめんとせば、ながく
として其道をしらるべきや。聖人の道をしるべし。吾ら人に示

學者にも良知なきといふことなく物に即てこの知を致さば
たとへバ未鍛のかねのごとし。昆吾の鐵といふとも。わかちがたくハ
鋭利の用をなさじ。未磨の玉のごとし。荊山の璞といふとも。みが
かざるハ温潤の色を發せじ。この理をよくしるべし。今孝なく
いふハ。聖人門人の孝を問て答へ給ふ所。又給へ孟懿子にハ無違
との給ひ。孟武伯にハ慎疾其の給ひ。子游にて不敬をいましめ
給ひ。子夏にて色難しと諭し給ふ。皆子親を敬愛するの心
おこなはるときハおこなはざる事なし。事親事長の上に付て。或ハおこなふに
ありて彼に掩れ又ハ私に勝て敬愛の敬勝て私あらざるなきの
給ふなり。ある仁を問答へ給ふも是に同じ。顔子にハ克己復礼

を告給ひしハ。克己復禮。必日用事物に即て其理を驗ず
事なれバ。視聴言動をもての給へり。仲弓にハ敬恕を告給ひしハ。
敬恕も亦日用事物の上にて驗るゝなれバ。出門使民をもての給
へり。其外も推てしるべし。六經の教も。良知をすゝむ事な
れバ。詩ハ思無邪をむねとす。書ハ毋不敬をむねとす。易ハ審衷識
時をむねとす。春秋ハ尊周攘夷をむねとすなれバ。何によらず詩
に國風雅頌の情をいひ。禮に經禮曲禮の目をわかち。易に陰
陽卦爻の變をしるし。春秋に朝聘會盟の事を備へ給ふ。六
の故に六經の教ハ。天下におこなはるゝ此の理を明かにするなれバ
此の理のおこらざる事なきハ。吾心の良知にもとづかざる事なからん

の知にさへはるゝなり然ときは先をとらぬ方を換する事も節文慎ま
さる事なし然れハ程朱の以上の致知力行ハ則孔門の博文約
禮にあたるにして何ぞその致知格物の説を義外とて譏る
ハ多く罪を程朱に得るのみならず實に孔門の教に遠かるもの也

釈寂室か秘訣

ある日講席にて翁との語りに。昔足利家治世の季に。寂室といへる
いひける僧ありしが入唐して大明に渡海し。東帰の後。僧侶
の依せしか其徒に語りいふやう。吾に緊要の一訣あり。秘密此
るがかまとも汝に伝へし。汝毎日晨に起きて手をもて頭顱
を撃ち又目をとぢて袈裟を顧み心に念じ口にいひて。吾ハ出家釈

迦文佛の法孫なれば。身ハ令を頒すとも比丘の模範を失
ふべからず。まして一の見悟なきをや。寂室ハ異端の徒なれども
殊勝なることなり。儒家にも道徳の志操ある人をきらひ大方儒
者の模範を失ひて反て釈氏に阿同し。彼か下風に立るを志す族
もあり。尹和靖の践履の厳整なるをハ。僧も甚く感し。儒家に
ハ周孔も及ぶまじといひ。朱文公ハ高風を圓悟に慕ひ。其
梅花の詩を和して。獨憐萬木飄零後既立風霜惨淡中とな
むいひけれ。二賢ハ真儒にして。異端を絶えしかとも。彼に帰向せし
そうし。今世の儒者なるに。武人俗吏にも。疑議せらるゝものハ。の
て人の敬信を得べきや。甚しきものハ戈を倒にして聖言を駁し

経学を識る者も。近来世に多く出来侍る。儒教の振ハざるにあらそ
理なくば。又近来武士の風の衰弱になりるも。人し多くハ武道に心懸
薄きが所致なくんば。此地によりて帰る者。武士なるしが子
弟に訓く。汝等すでに太刀を佩く武士と名のる上ハ。翁
夕武名をけがさしめじ。あのふや。ちなく此もの口伝あり。汝等門
外にある事あらば。家の国を覊く時ハ。必気を注ぎて帰る
多ん家に帰りして見附まくし。此見附なくハ外なくて及る此
あとあらん時ハ。心おくまじ。寂寞と家と道ハ
要ることも。其見顕ハ聞しるすなり。さまハ心の道をも心懸帰る
き人の…なんあるを似其心急く忘るゝすハなふてす

そぜいふ。釈氏ハ不戒を破らず。聲利に走つてるを以て武士ハ
武道に不覚をとらざるをいかにやあらん。まさハ絶ゆる紛を
あらぬ。吾儒の道も百行を兼まハ。仁の
上の頭目として心得べき。翁常に立居にたまく云ふ。是ハも
忘るべからざる。其ことハ。父の恩。君の恩。聖人の恩なり。欒
共子が言に。先王之制民生於三事之如一惟其所在則致
死焉父生之君養之師教之と。今も是欒共子が始て云ひ
おるを先生の大剣にして。古今此通誼なり。中にも師と云
に同異あり。道徳の師あり。術業の師あり。古人も人師ハ得
易く経師ハ得やすしといへり。後世に到てハ道徳の師ハ得

このごとく、大かたは術業の師なるを、君父の恩に並ぶべきは稀なるべし。
又後世に教をなすこと、我人信頼し、其恩源長なるは聖人な
り。夫報本不忘恩は、人道の大端なるされば、父母は我の本体な
り。我をうみて我を育る。一毛一髪まで、父母の遺體にして、
遺愛のあるものにあらざるはなし。ゆゑにしかと忘るべきにあらず。さて君恩に
浴して、不饑不寒、妻子を営み、親族を賑はし、すべて養生送
死の道、世話にいふ箸一本までも君恩にあらざるはあらず。これまた
忘るべきにあらず。然れど飽まで食し、煖に衣て、君父にはかられるのみにては
禽獣に近からん。幸に聖人の教によりて、義理のあらましを
知るも禽獣に免るゝは、これ聖人の大恩にあらずや。いかにて忘べく

きおよ拙く人として、常に此三を忘ずは、天理のあるべき所にかなひ
まして、本心を失ふこと有まじ。衆善のおのづから来るもの也。
翁ハ常に此三を忘ざるをもって、身に守り、世に伝へ侍る。
家学の要訣とも申べし。今人家の子弟を見るに、多くハ我
身の楽をのミ思ふて、君父の恩を思ひ忘るゝものおほきによりて、
言行に慎みなく、放逸に流れ侍る。又老子碩学と称する人も、
聖人の恩を我身におもひしらざる故に、自から高ぶりて名聞を
務む。篤實なる方ハ露のことも行ふべし。此翁が家の要
訣を授く。内省せしめハ、陽浮の気を除去して、誠實にす
すむ。此媒ともなるまじ。されバ彼が師といひ弟子といふ者、程

朱親切の訓を聞てハ嘲笑て頭痛するといへり。悪心を
やしなふもおなじと。人の諂らハ翁の今の如くなるときハ。さて我嘔
吐もせねハしかし世に篤学の人しなけれハ老耄の贅言をお
ほさん事ハ我忘れぬへし

駿臺雑話巻一　畢

島田藏書

鷲津氏